

愛媛県西予市における ナベヅルのねぐらの利用状況について

○伊藤加奈(公益財団法人日本野鳥の会)、松田久司(NPO法人かわうそ復活プロジェクト、日本野鳥の会愛媛)
楠健明(宇和コウノトリ保存会)、源琢哉(西予市)

背景

ナベヅル、マナヅルは、鹿児島県出水(いずみ)地方での越冬の集中化により、感染症が発生した際の絶滅のリスクや農業被害等が問題となっている。このため、出水以外で越冬環境を増やすことが世界的な課題となっている。

越冬地保全を進めるにあたり、ねぐらの確保が課題の一つになっている。適した環境が非常に少ない上に、ツルは警戒心が強いいため、人や動物の接近があると、ねぐらを放棄してしまい、定着しない事例が多い。しかし、夜間であるため観察事例が少なく、その詳細やねぐらにおけるツルの行動については、ほとんど分かっていない。



ナベヅル(上)、マナヅル(下)

- ・推定個体数: ナベヅル 約 16,000羽
マナヅル 約 6,000羽
- ・分布:(繁殖地)ロシア、中国、モンゴル
(越冬地)日本、韓国、中国
- ・IUCNおよび環境省レッドリスト:
絶滅危惧Ⅱ類(VU)

越冬地では、主に水田で穀類の落ち穂や植物の種子、昆虫、小型の水生生物を食べる。基本的に家族単位で過ごすですが、数十羽の群れで行動することもある。夜間は、水深10~20センチ程度の河川の中州や干潟の干出部、湿地、ため池等でねぐらをとる。

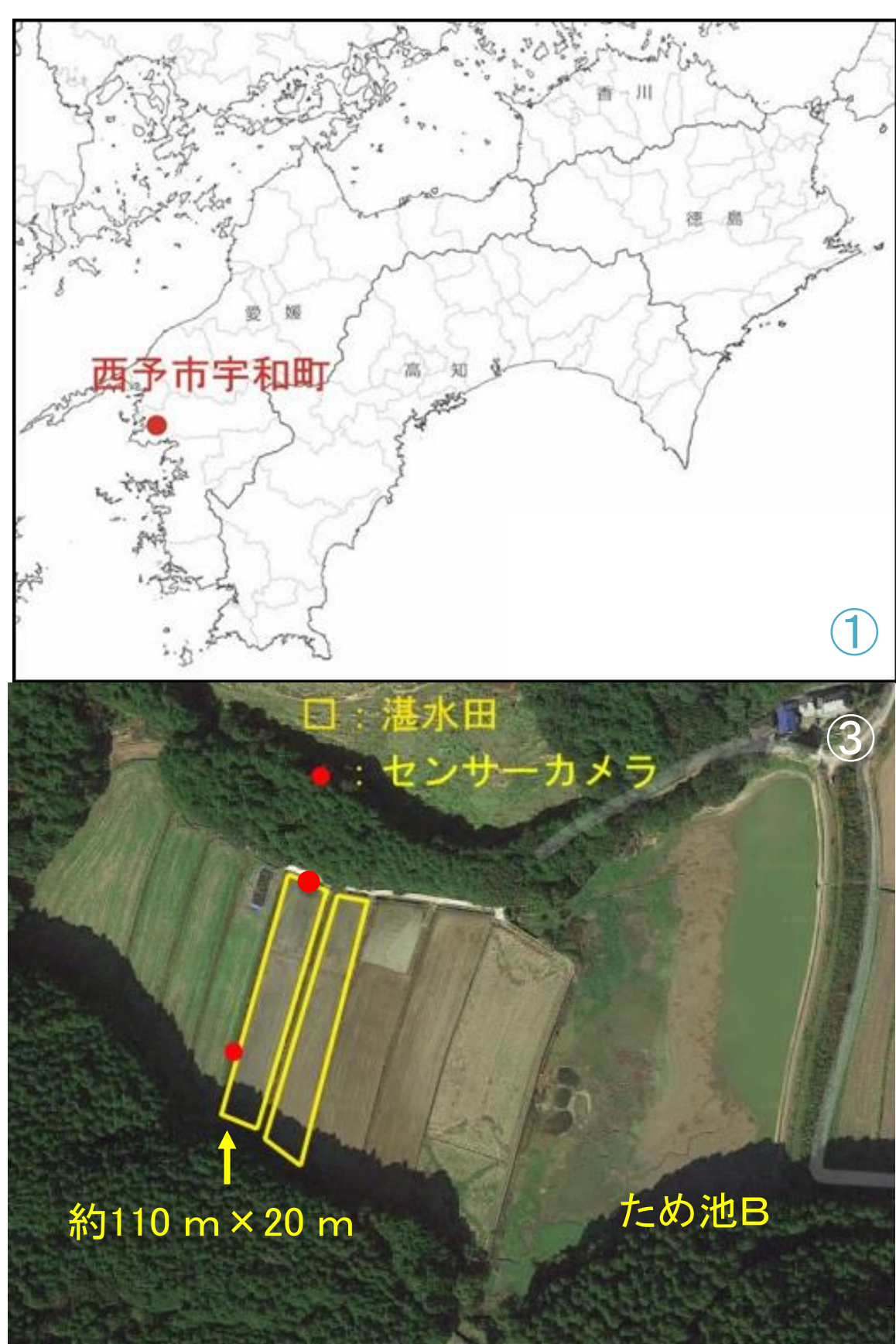


図1 西予市宇和町(宇和盆地)の位置
県内でも有数の稲作地帯で、約130のため池を有している。

図2 ため池A

図3 ため池B及び冬期湛水田と自動撮影カメラ設置場所

※保全上、詳細地は非公開

目的・方法

そこで、ねぐらの利用状況を把握するため、2015/10/29~2016/3/17にナベヅルの渡来が確認された愛媛県西予市において、2か所のため池(A、Bとする)と冬期湛水田において、朝・夕の目視における観察(※1)、自動撮影カメラ(※2)の設置、住民等からの目撃情報の収集により、利用場所と個体数を記録した。

※1 主にため池B及び冬期湛水田で実施。(ため池Aはツルに影響を与えずに観察できるポイントが無かった)

※2 冬期湛水田に赤外線照射カメラを設置。(12/18~3/16)
センサー反応距離 25m、最長赤外線照射距離 20m

結果

2015年度(2015-2016) ねぐら利用場所と個体数

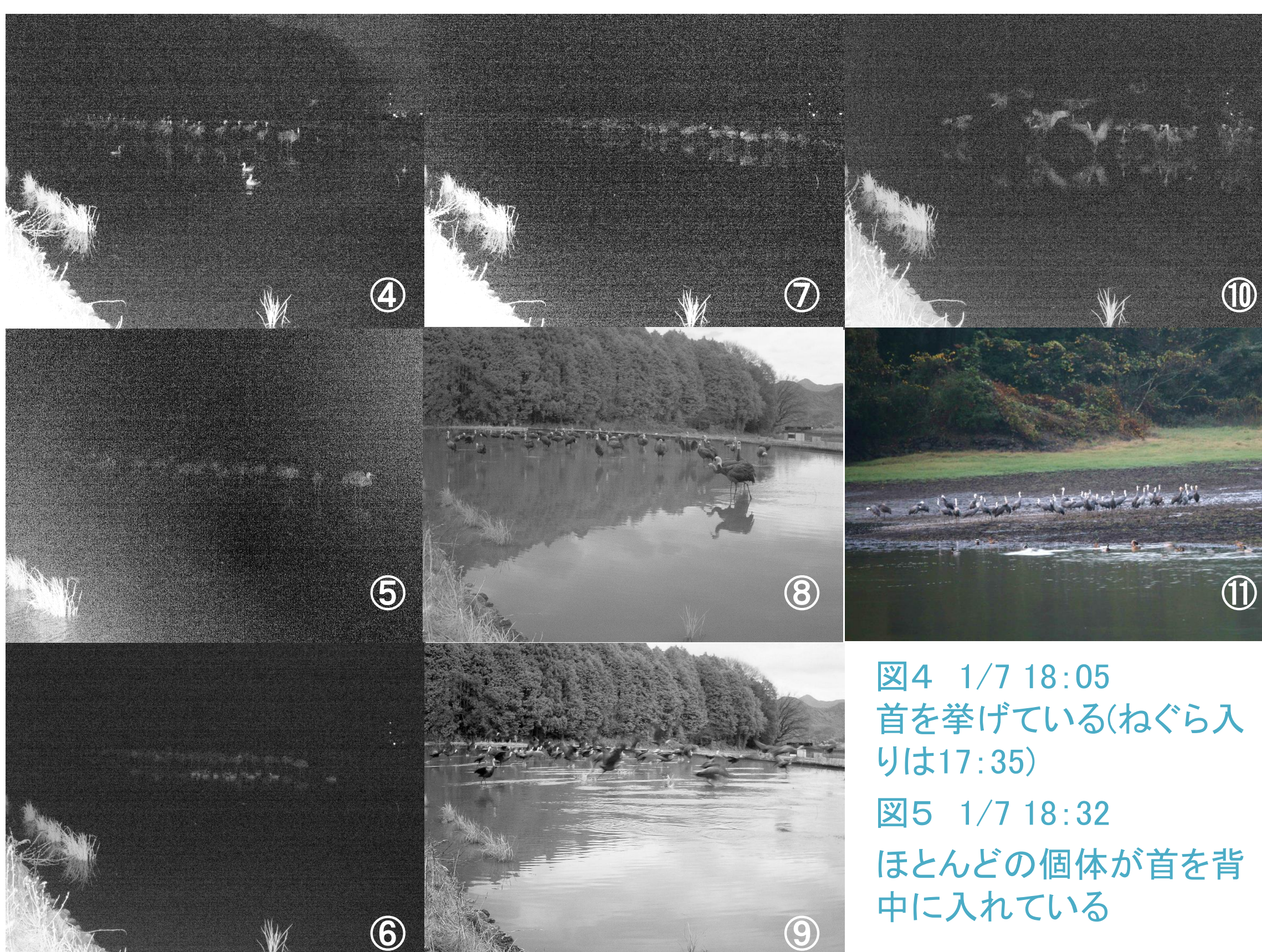
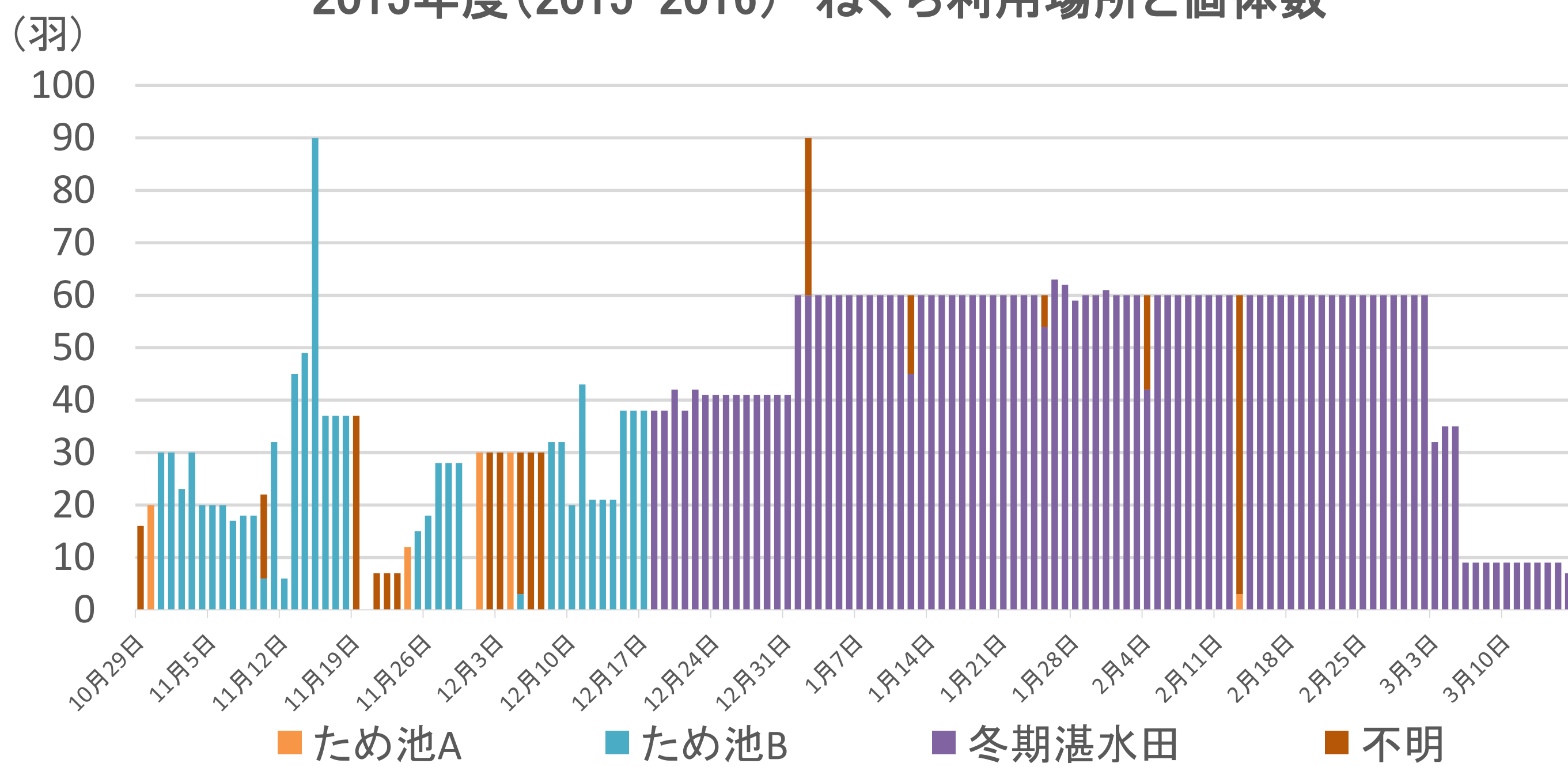


図4 1/7 18:05 首を挙げている(ねぐら入りは17:35)
図5 1/7 18:32 ほとんどの個体が首を背中にしている
図6 1/7 23:45 首を背中にしている。手前はカモ
図7 1/7 6:16 首を上げ始める
図8 1/8 7:18 ねぐらから飛び立つ前
図9 1/8 7:28 ねぐらから飛び立ち
図10 1/12 20:18 何かに驚き、飛ぶ
図11 11/12 6:21 ため池Bの様子(望遠レンズにより撮影)

・越冬期の初期は主にため池B、中・後期は、冬期湛水田で利用が確認された。

・ため池Aは、朝・夕に散歩などによる人の立入りがあるため、利用頻度が低かったと考えられる。

・11/19~12/7は利用が不安定だった。これは、11/19に餌場で人的攪乱が生じ、しばらく当該地でのツルの越冬が不安定だったことに加え、11/27、11/29にツルがねぐら利用中に飛び上がる姿が確認されているため、攪乱が起きたことが原因の一つと考えられる。(11/29はキツネの接近によるもの)

・越冬中・後期に冬期湛水田を利用するようになったのは、12月よりため池A、Bにおいて、池内で工事が行われたことが原因と考えられる。

・今シーズンは、ツルは基本的に1つの群れで行動していて、夜間においても同様だった。1月下旬になると、2つのグループに分かれて冬期湛水田を利用する姿も見られた。

・自動撮影カメラの画像から、夜間にツルが一斉に首をあげたり、飛び上がる姿が複数日確認された。他の動物の接近があったと考えられる。ツル以外の動物は、冬期湛水田の周辺で、キツネ、タヌキ、ノウサギ、イノシシ(痕跡)、カモ類が確認された。